

長崎豪雨中の異常強雨の体験

荒木 眞壽男 (北松福島小学校)

23日16時50分

長崎海洋气象台発表

『大雨・洪水警報, 強風・雷雨・波浪注意報』

大雨・洪水・雷雨・強風・波浪注意報を大雨・洪水警報, 雷雨・強風・波浪注意報に切り替えます。

対馬海峡に低気圧があつて東に進んでおります。

梅雨前線の活動が活発になってきました。

長崎地方では、今夕から明朝にかけてときどき雷を伴った強い雨が降り、山崩れ、がけ崩れ、低地の浸水、河川の増水、はんらん、落雷など大きな災害の発生するおそれがあります。十分警戒してください。

雨量は50~100ミリの見込みですが、局地的には150ミリを超える所もあり、比較的短い時間に集中して降るでしょう。

また、南よりの風が強く、陸上で10メートル、海上では10~15メートルに達し、波が高くなる見込みですので、船は注意してください。波の高さは2~3メートルの見

込みです。

警報のとおり、ほんの2~3時間後、未曾有の大災害が起ころうなどとは露知らず、早めに済んだ夕食のあとの体を横にして、本を広げていた。今しがた19時30分を過ぎたばかりという時刻であった。

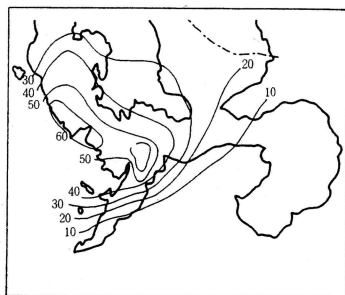
「お父さん、早く来て！ひどかあ。川ンごたる」アルミサッシのぶ厚いガラス戸を開けて外をのぞいていた家の者が、けたたましい叫び声を上げた。

「ああー、また始まった。よう何にでもいちいちビックリするもんだ。ほんとにもう！」と、内心ぼやきながらも、

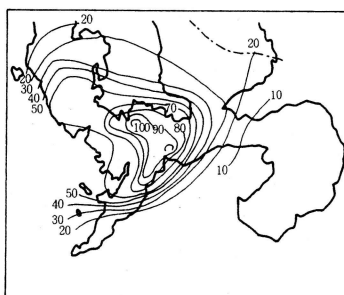
「どれ、どれ」など言いながら、つき合いの態で私も窓際に立った。

「おお！…」私は絶句した。何ということだ。家の前が川になっているではないか。

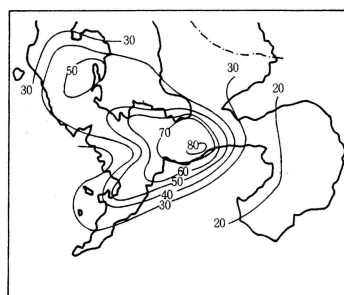
私達が住む中小島町のこの一帯は、丸山「花月」に隣接し、戦前からそのままの道筋である。



19:00~19:30

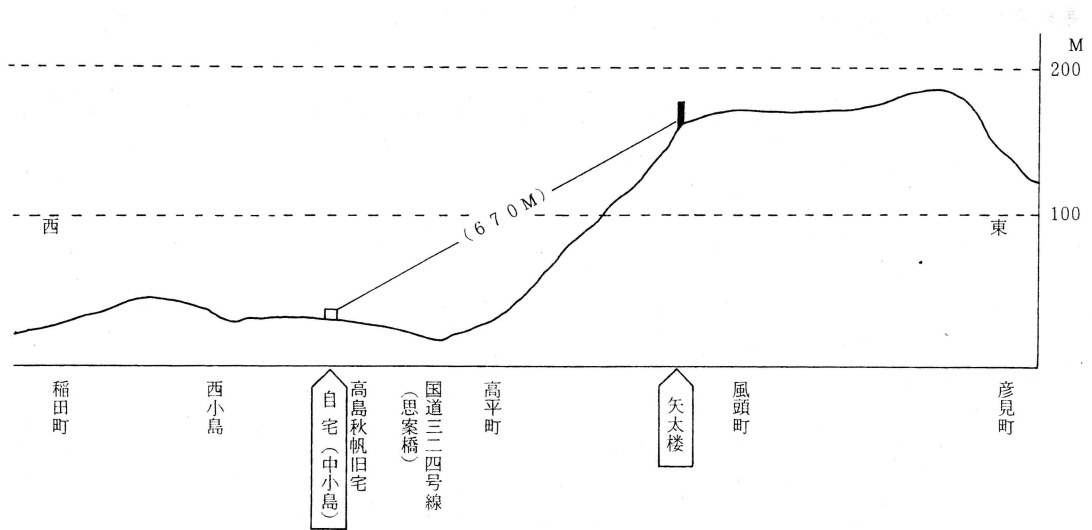


19:30~20:00



20:00~20:30

30分降雨量分布図 (昭和57年7月23日) (7. 23長崎大水害誌——長崎県土木部)



その幅4m余りの道路を挟んで、私が住む方の西側の家並と、向い側つまり東側の家並とが軒を連ねて建ち並んでいる。

今、その道路が完全に姿を隠し、それがあべき所を、褐色の濁流が強い雨足にしぶきを上げながら、激しい勢いで川となって流れ下っているのであった。

「こんげんこたあ初めてはい！今までに無かこと！」

正にその通りだった。この家に生れ育って50余年。こんなことは未だ見たことも聞いたことも無かった。

道端の電柱のすぐ脇からは、濁流を押しつけて、4斗樽を逆さにした程の水柱が吹き上がっている。あそこは、この道路沿いの溝が路面に顔をのぞかせている所だ。水かさは、もう25cmには達していよう。大溝も、軒下も、道路も濁流の下にあって、どこがどうなっているか見分けすら付かない。窓下のその流れを見下ろしていると、まるで急流の崖縁に建った家にでもいるかのような錯覚に陥いる。

まぎれもなく、このような事態はこの町が出来て以来、未だかつて起ったことのない異常事態であるに違いなかった。

ところが何とした事か、私はそういう事態を

眼前にしながら、「この水が、一時に低部の繁華街に流入したら、どんな事態が起るか」という、たったそれだけのことすら頭に浮かばなかったのである。

濁流はすでに向いの家の軒下を浸して敷居を超えようとしていた。そして、その屋根越しの東方斜め延長上の、600数10m先には、何事もないかのように全館明るい照明を放った矢太楼（旅館）が望まれた。

……と、その時、ひときわ激しい降雨が背後から襲来した。それは私の目の前の濁流を叩き、向いの家並を瀑布さながらに包み込んで東進した。もう一切が水にとじ込められてしまった。そんな感じであった。

矢太楼の建物の輪郭が瞬時にして消えたと見る間に、まるで舞台のスローな暗転かのように、全館の灯りが小さくなって消え去った。

何と強烈で濃密な雨であろう。私と向いの家並との間、僅か10m余の空間を占めるだけで、あれ程明るい全館の照明を完全にしゃへいしてしまうとは……。それはもう、尋常な降雨とは桁はずれの、巨大な水柱とでも言うべき強雨であった。

この類稀な強雨は、およそ20分ばかり続いた

であろうか。その間、私は息苦しい圧迫感にとらわれ続けたが、その中で「この雨はすごい。もし、『瞬間降雨強度!?!』だったら記録的なものに違いないぞ」とか、「この雨の中の空間を粹取りして、大気中における雨滴総量の割合とでも言うような捕らえ方の数値を出したら、一体どれ程のものになるだろう」とか、「粒度分布にも、きっと際立った特徴があるに違いない」等々、あれやこれやが形にならないままに頭の中をかけ巡った。

やはり、異常強雨という事態の真只中であって、高まる一方の興奮から、何とか平静さを取り戻そうとする心の働きの表れであったのだろう。

長崎豪雨が引き起した壊滅的な災害、そして消し難い苦痛と悲嘆の総べてが、私の場合は、この時体験した異常強雨の興奮とつながっていたし、その印象の中心には、雨中に消え入った矢太樓の灯りがあった。

それから幾日かの間、夜毎、不夜城の如く光彩を放っているのを見るにつけ、鮮やかにあの

時の光景が蘇る。

しかし、いつしかそれらの印象も次第に薄れていくに違いない。「そうだ、今のうちに疑点のない確かなものにしよう」

そう決心して、矢太樓に問い合わせの手紙を出すことにした。「あの夜、19時から20時にかけて、停電はありませんでしたか」

こういう問い合わせであったが、幸いなことに、いい担当者がおられたとみえて、すぐ返事を送っていただいた。

結果は、その時間帯に停電は全く無かったこと、また、館内の照明が暗くなるような事態も、一切起らなかったということであった。

尚、これらについては、当夜の記憶だけでなく、備付けの日誌によっても確認した上でのことである旨、書き添えられていた。

やはり、長崎豪雨の中であって、ひときわ強烈であった異常強雨の体験、しかもその襲来時における際立った移動の一コマを眼のあたりにするという機会に遭遇したこと、そして、そのときの震えるような思いは間違いのないものだったのである。